お兄ちゃんはお姉ちゃん！？

創輝　咲弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お兄ちゃんはお姉ちゃん！？

【Ｎコード】
Ｎ８９５８Ｗ

【作者名】
創輝　咲弥

【あらすじ】
この物語は自分のブログ
「何が何でも幻想入り」からの
転送です
少し表現やタイトル
内容の追加などがある可能性がありますが
よろしくです
ちなみにブログでは「血縁なんて関係ない！」で
やっています

これが原作です

このストーリーはオリジナルです

キャラ紹介（前書き）

この小説は中学1年生が
想像にまかせ、妄想入りの
小説です
読んで感動する系の物ではないと思われますが
楽しんでいただければ嬉しいです

キャラ紹介

［閉じる］

主人公

七咲（ななさき）　優（ゆう）

男、１３歳、中学１年生

身長、１３５？

体重、２５？

性格、仲良くなると良く喋ってきたりするが
仲良くなるまではしーんてきな人見知り

やるときはやる！
けど、めんどくさがり

明るく、元気、すこし意地悪

髪型、女の子のショートな感じで
きれいな金髪

特技、バスケット、料理、運動系

その他、スタイルがよく男であっても
女装したら、まったくもって
男と解らないほどの可愛さ

バスケ能力は驚くほど上手い

ミニバスではキャプテンだった

しかし、身長の問題上

ポイントガードしかほぼしない

お兄ちゃんは行ってくる（前書き）

はじまりはじまり

お兄ちゃんは行ってくる

運命ってものはちょっとした所にあると思う
それが嬉しいこと、悲しいことなど関係なしに
いつかは、やってくる無情なものだ。

そんのもの無いと信じたいやつもいれば、信じるやつもいる。

そんな運命を俺は今、確信した。
突然の事でしばらく追いつかなかった頭がやっと、現実を…理解した。

親の死、そんなものがこのときに起きてしまった…

親は二人でドライブに出かけたらしい
俺達兄弟は学校に行っていた

そのドライブで対向車線のトラックが車線をはみ出して
親が乗っていた車に正面衝突した。
親は即死、トラックは隣の民家に突っ込み運転手は重傷、

何ともいきなりの事だった…
死んだんだと思うと朝、いつものように交わした
挨拶が何とも寂しい最後の会話だったと思うと
これからの事で不安になる

何を話しているかは俺はもう理解していた
誰が子を引き取るかだろう。

兄弟は3人で俺は真ん中
兄が居て、妹が居た。

それから3時間親戚たちがなにか決めた様子だった
そしたら俺の方に来て言うのだった
「ねぇ、優君、話があるの、嫌かもしれないけれど
最後まで聞いてね」

来た、俺はそう思った、結局3人じゃいれないとかだろう
年齢的に話すべきか迷ったのだろう
そんな事を考えていたときに聞いた言葉が
俺は信じられなかった、信じたくなかった

「優君はねお母さんの子じゃないの…小さいころに
本当のお母さんは亡くなったよ」

ありえなかった…あんなにやさしいお母さんが
本当のお母さんじゃ、ない？
自分はまたパニックになりかけたが
なんとか保てた

そのあとに聞いた話によると
自分だけが違うお母さんで
他の2人は本当のお母さんらしい

なんだよ、自分だけ仲間はずれかよ！
そう思って聞いていたら
また驚くことが出てきた…

なんと、これから住むところは

自分の本当の兄弟で他の家に
引き取られた所らしい

しかしその家もまた親が病気で死んで
親戚の大学生の人が家を守っていたらしい
俺はそこに行くらしい

家族構成は大学1年のおじさんに
高校2年のお姉さん、中1のお姉さん、
小4の妹みたいな女の子
らしいこの中に俺が入るらしい
ついでに俺と血が繋がっているのは
中1の人らしい

詳細はまた後でという事で今日はもう寝た

このときの自分は何を考えただろう
何も考えてはいなかったろうか
しかし
このあとの事に不安を抱いていたことは
確かだ…

新しい家族

翌日の朝、学校に行き、先生に事情を説明し
帰りの会で転校する事が開かされた
ちなみに転校するのは来週の土曜日
今日は水曜日、もう少しだけは時間がある
しかし、そんな余裕はなく気がつけば…

土曜日、引越しの日
家の前には引越しのトラックが止まっている
とは言っても一人なのですごく小さい…

荷物もそうなくすぐに乗り親戚、今までの家族、
送りに来てくれた親友に軽く挨拶し、
車に乗り込んだ

「もう行くんだね…お兄ちゃんの事忘れないからね！」
妹だ…そっか、お別れか～、やはり別れは悲しいな
「俺だって忘れないよ…また会おうな」
そういったあと、自分を乗せた車は発車した
別れは寂しい、悲しい、けど、まだこれから
新しい出会い、嬉しいこと、楽しいことが
あると思い、我慢した

新しい家の近くまでやって来た
だいぶ遠くにあり、自分の住んでいた岡山から
滋賀の大津にやって来た、まだ滋賀県の事を良く知らない
知っていたことは、琵琶湖があることぐらい
そんな所にやって来た、不安はあるがそれよりまず、

楽しみ、期待が大きかった

新しい家に着いた、思ったよりも良い感じの一戸建てで
ちょうどのサイズかもと思ったがなんか狭く感じた、
まあそんなに余裕はないのだろう、俺が来たからな…
どんな家族だろう、怖くないといいがたぶん問題ないだろう
とりあえず、インターホンを押した
こんなにドキドキしたのは告られた返事を言う時いらいだった
なぜ返事でそこまでなのかはまた機会があれば教えよう

「は～いやら」
そう、男の人の声と共に足音が近づく
なんにんかの足音が止まりガチャリと扉が開く音がした
「はじめまして！今日からお世話になる七咲　優です！」
とにかく人が顔出すとそう挨拶をして頭を下げた
「はじめましてやら、とりあえず中入ってやら、荷物は
入れといて貰うやら」
男の人はそういうと中に招き入れた

家に入ると玄関に女の子が3人…
とりあえずをしよう…えっとどうしよう
なんて言おう…
「え、えっと、七咲　優です　呼び方はなんでもいいです、
え～、13歳中1です、よろしくお願いします」
うわ～～なんかおかしいな…しかたないか…
「よろしく、優！」
高校生の人が挨拶をしてリビングに入った
自分もそれに続いて入ってく女の子の後ろで
きょろきょろして入ってった

「そうだ、名前教えてくれませんか？」
いきなりで悪かったかな？
とりあえず聞こうか
「私は福井（ふくい）　月菜（るな）高校2年
月菜姉でもなんでもいいですよ」
ほほ～月菜姉か、どうしようか
「えっと、福井　奈々夏（ななか）です、中1っしょ
奈々お姉ちゃんでいいっしょ」
奈々夏さんか、奈々お姉ちゃんか
「福井　遊南（ゆな）遊南か遊南ちゃんでよんでね
お兄ちゃん」
そうか、お兄ちゃんか、
可愛いな～仲良くしようみんなと
「俺は福井　麗夜（れいや）だよろしくやら」
麗夜お兄ちゃんか…お兄さんの方がいいやすい

そのあと少し話をした
全体的に向こうから聞いてきて自分は返事ぐらいだった
まあこうなるとは思っていたけどぉ～
そしてご飯を食べるときになった
「もう7時か～お腹すきませんか？」
そう言った
「じゃあ今日はファミレスいくやら」
そう言って準備をした

本当の家族？そう、俺の家族

「おお～初めてだな～ファミレスって」
そう、前住んでた所はこんな街じゃなかった為
ファミレスなど無かった…
「そうなのですか？じゃあなんでも頼んでください
お金ならお兄さんに任せとかば問題ないです」
月菜姉さんは優しいな
しかしお金が気になるから高いのは避けよう
「やらっ、金の事を任せるな！月菜も
ちゃんとしないとお嫁にいけないやら？」
おお～反撃反撃…あまり意味も無いかもしれないが
「ねえねえ優ってさ～何時から学校行くのぉ～？」
おう～そういえば行って無かった…ん？
俺も聞いてないじゃねぇ～か
「わかんない…あ、食べるの来たよ」
ちょっと自分も知りたいな～お兄さん
知ってるかな？
「ああ～来週の月からやら、
なんで聞いたやら？」
だって、一貫校だからね、一緒に歩いて行くんだよ
気になるじゃんか～」
「火曜日やら」
「火曜日から？兄ちゃん？」
「そうやら」
おお～一貫校か～
この後聞いたが高校まで同じらしいw
なんて学校だ
「お兄ちゃん火曜から一緒か～楽しみにしてう～」

おお～～遊南は可愛いな～そう思いながら
笑顔を向けた

そうした会話をまじえて楽しくご飯を食べて
家に帰った…行き帰りは自転車で
自分は…なぜか月菜姉さんの
後ろに乗った……なぜ??

～～家～～
「あの～所で荷物は何処の部屋に?」
つまりは自分の部屋は?ということだ
なんか嫌な予感がしてたまらないぞ
「あ～えっとやら…奈々夏ちゃんと同じ部屋やら」
「は、え、まじで?」
なんだよ～～嫌な予感さんよ～当たったじゃんか～
とりあえずどうゆう事か聞こうじゃんか
「うん、奈々夏ちゃんの部屋は少し大きかったから
2人でもマシだと思ってやら」
へ～～あんたはなんかおかしいね
「そうじゃなくて、なんで女子同じ部屋で?
部屋余って無かったの?
そうだったらお兄さんのへとゆうのも
ちょっと考えてくれよ
中1だとしても、もう13歳だよ?
さすがに女子とは、しかも中1…血が繋がっていても
だね～さすがに問題が…
「なに～?優は私とが嫌っしょ?折角準備したのにっしょ～」
ぐはっ、さすがにきついぞ今のは…
もう断れないな…まあいいか、問題あってもしらん、んなもん
「は、は～いわかったよ～一緒でいいです」

もう、先が心配だ…何か楽しい気分でもあるのが
不思議だ…
「じゃあお風呂入っておいで～部屋は奈々夏が
なんとかしといてくれるから少しで寝れるように
なると思うやら」
お～それは助かる
「じゃあお言葉に甘えて」
そう言って自分は
お風呂に入った…

「あ～明日は一緒に遊びに行くっしょ？」
相談はあまり大きな声ではしていない
バレルと行けないのだ
「そうだな、何処行こうか、優君はどこが良いやら」
「お兄ちゃんはね～え～っとね、わかんないやぁ」
ぇへっと笑って誤魔化した遊南
「そうね～とりあえず買い物ですか？
そのあとにゲーセンでも行きますか？」
「そうだな～うん、明日はなんか買ってやるやら
お前たちも一緒に買ってやるやら」
「ホント～～やった～」
そして優が上がって来そうだったので
会議は終了し、部屋に戻ってった…
奈々夏だけは残っていた部屋を紹介する
為であろう…風呂はそのあと…

暖かいが暑くない初夏の風が家を通り抜けた…

新しい家での生活

しかし、ほんと驚いた…
なぜこうなる

同じ部屋はまだわかるのだが同じベットは無理だ…
さっきから姉さんに言うのだがまともな返事が来ない
「だから～同じベットは問題あるって」
「大丈夫しょっ！双子なんだし」
おい！どういう理由だ！！
もう諦めて床で寝るしかなさそうだな…
「優～、ほら寝るっしょ！」
「え？わあっ」
姉さんが急に後ろから抱きついて
そのままベットに入れられた
「奈々姉～何するんだよ～離れろよ～」
あまりの事に少し怒ってしまった
「いいっしょ！別に…いぃ…ｚｚｚ」
寝、寝やがった！
くそ～しゃあない寝るか

～～～朝～～～
「ん～なんか暑い」
背中の方になんかくっついてる…
「そっか～～奈々姉か～…
奈々姉起きろよ～」
「ん…優？おはよ…」
そういうともそもそと起きてくれた
自分もベットから抜け出して

顔を洗いに洗面所に向かった

「おはよう優さん、眠れました？」
「おはよう月菜姉～ちょっと寝にくかったです」
本当にね
「そうですか、まあ分かります、奈々ですよね」
「そう、奈々姉です」
そんな会話をし、着替えて朝ごはん、　のハズが

「奈々姉～～離して～～」
「嫌っしょ、さあ優、食べてっしょ～あーん」
「何する～～」
とかなんとかになった…

そしてお兄さんが今日は買い物に行こうと言ったので
支度をした…一様街なかに行くようなのでセンスの良い服の取り合わせにした

「へえぇー、駅に近いんですね～」
思った以上に駅に近く良い土地らしい
「ここかりゃ、京都に行くんだよぉ」
そっか京都か良いな～京都か～

「わっ、何この多さ」
ホームにあるダイヤ表を見て驚いた
快速とかもいっぱいあるし
新快速まである…さすが都会だなw

そんな驚きもありつつ電車では椅子に座れ（椅子多いからw）
京都に着いた

楽しい買い物！？

今は京都、でかいショッピングモールで買い物をしようと
いうことになりました

しかし京都はホントに人が多い、休日といっても多すぎる…
そんな事を考えながらふと思う
あんまり人の多いとこ好きじゃないんだよなぁ
だって、
「何買う？欲しいものは？？」
そんなことを考えていると
月菜姉が顔を覗きこんで言ってきた
「えっと、服とか靴とか…その位です」
考え事をしていたがすぐに返事した、
あまり欲張らずファッション系で少し買ってもらおう
だって…
「優～もっと無いっしょ？服なら一緒に選ぶのにぃっしょ？」
「う～ん、無いね。奈々姉一緒に選んでくれるの？」
欲張りは厳禁だし奈々姉が居れば安心だ、いろんな意味でもね
「じゃあそうしてもらおうか、奈々ちゃん頼んだやら」
兄さんがそういうと奈々姉は自信満々と
「大丈夫！任せてっしょ！」
と言って俺の手を引っ張って行った
こんな可愛い姉が手を引っ張っているところを他の人からどう思う
のかな？
歳とか身長とか似てるし…？付き合ってるように、ないない、自分
で否定して
奈々姉の隣に並ぶ一なんだか知らないけど通るとこ、みんなが俺た
ちを見ている

金髪のせいだろうか？二人ともだからか？
自分の中で疑問を作っていたら若者向けの靴を売っている店に奈々
姉が入って行った
自分も後に続いて入った
中には運動靴からスニーカー、いろいろ売ってある
ちなみに自分の足のサイズは２３，０？
とても小さい、探すのは大変なのだ
良い靴でもサイズがあるかどうかなのだ
少し大きいサイズなら丁度、よく残っている、とても小さいもんね
そんな事を考えながら良い靴を探す…
そういえば、兄さんたちは何買うんだろう？

そしてこの店では新しいスニーカーを買った
オレンジがベースで少し白が入っている
以外と好きな色合いなのだ、靴ひもはもちろんオレンジ

そして、次は服を見た
店の人には女の子の服を進められたが男なのでと断った
まあ奈々姉もすごく推している服があったので
一つだけ女の子の服を買った
しかし、すごく似合っていたので周りの客も少しみとれているほど
だった
そのあとは、雑貨屋に寄った
奈々姉がいろいろと買っていた
ちなみにここには１０分ぐらいいたが
周囲からはいろんな視線が送られていた
その視線を気にしつつ会計を済ませたら
少し喉が渇いたと奈々姉が言った
俺も頷いて一緒に
フードコートに行くことなった

何を買ったんだろう

フードコートに着いたらおいしそうな匂いが
漂っていた、その匂いを嗅いでいると
すぐにお腹がすいてきた、
こういうときは
一緒になんか食べよう
そう考え奈々姉に
ある提案をした
「奈々姉～、フードコートでアイス食べようよ～」
「そう？まあいいっしょ～開いてる席あるっしょ？」
よしきた！こうなったら良い席確保しよう
フードコート内を一周見まわし窓辺の席を発見した
「窓辺の二人席開いてるからそこで良いよね？」
「おお～いいっしょ！近くに中学生の男子グループ居るけど
たぶん大丈夫っしょ」
そういうと俺はアイスを奈々姉に任せて
席を確保しにいった
なんか座っていたら周囲からの視線が痛い
今日の服は男もんのハズだがなんか
可愛いなあ～…おかしい…

「お待たせ～とりあえず同じのにしといたっしょ」
奈々姉はストロベリーのソフトクリームとコーラを
２つ買ってきた
「ありがと～、ねえ？俺って男としてカッコいい？」
ふと、気になったので聞いてみた
なんか一つ嫌な返答がパッと思い浮かんだが
まあいいや

「そうだね～優は…カッコいいより可愛い！っしょ」
「やっぱりか…まあいいや」
ちなみに優は身長がすごく小さいし顔が可愛く
髪型は女の子のショートにそっくりのせいで
パッと見いは女の子なグライである
嫌いじゃないけどさ

二人でソフトクリームを食べていると
男子グループの2人が声をかけてきた
「なあ、2人さん、双子？可愛いね＾＾
一緒に買い物とかしない？」
なんだと、奈々姉の顔が真っ赤だ
ついでに2人とも身長は同じぐらいで低く
双子である…俺、女だと思われてる？

「あの、ちょっと困るのですが～…」
そう言って見ると
「ええ～なんでさ～女の子二人だと危ないよ～？」
「だから…俺、男ですよ、ついでに家族と来ているので
困ります」
どうだ？諦めるか？
「まじで！お前男？ありえねぇ～
何処の学校？」
「え、ちょ、「あんたいい加減にしないっしょ？
あと私あんたと同じ草津一貫校の
中学生です、たぶん同級生だと」
わ～～さすがだ、奈々姉は心強いね
男子グループの二人は言ったんグーループに戻るなり
何かを喋ってからやって来た
「なあなあ、折角だから写メとらして？」

う～～ん、どうしようかな
奈々姉にアイコンタクトを飛ばすと
仕方ないわね、と返事が来た
「えっと、いいですけど～」
「撮るなら一緒に写るっしょ！」
奈々姉はそう言って男子の前に
立った、身長的に丁度よかったのだ
そして写真を撮り
別れた
「いきなりでびっくりした～」
「そうっしょ～本屋にも行こうかしら」
「おっけ～、本屋で何買おうかな～」

そうして買い物をして
兄さんとも合流して家に帰った

妙に兄さん達の買い物袋の量が
多く思えた

何を買ったんだろう？

「兄さんもうやめてください！
俺が可愛いからって別行動を良いことに
女もんの服買わないでください！
しかも似合ってるし、サイズも良いのを…」
何があったかと言うと
兄さんが女ものの服を買ってきて俺にくれたのだ

「お似合いなんだしいいやら
あと俺は禁止で『私』にするようにやら」
「え～～ないよそれわ～～～～！！！」
絶対に嫌だな
「優ちゃん可愛い～～っしょ」
「うううううううう」
くそおおおおおおおおお
奈々姉の仕留めでもう言い返せなかった

ついでに「優ちゃんのだよ」とか言われて
渡されたのは私服、それも女もんの
服だった…

一つだけ買ったけど兄さんがそのまま部屋に持って行った
物のうち、女もんがあった気がした、しかも派手な
なんだろうか？サイズ的には小さかったが？

そしてこの日はベットに着いた

今日から新しい学校！可愛い転校生！？

「ん～～…」
もう朝かな？
「優～！朝だよ起きてっしょ！
今日から学校行くんっしょ」
そっか今日からか、
月曜日、さてどんな学校かな？
「うん、おはよ～
ねえ？学校の制服どこだっけ？」
昨日どこに置いたか忘れてしまった
「机の横にあるっしょ、でも何でっしょ？」
「いや～、制服が気になってね」
「そっか～そうそう着替えて
降りてくるっしょ、もうご飯できてるっしょ」
「うん、わかった～」
そうして着替えてみたもののの
サイズは少し大きめでちょうどいい感じである
まあそれはいいが…この服センス良いな
そんな事を考えているとあるものが目に入った
「あれ？昨日こんな髪止めあったっけ？」
ふと視線を落としたら胸当たりの
ポケットに髪止めが２つあった
しかもピンクと水色で可愛かった

「おはよう～」
一階に下りるともうみんなそろって食べていた
家族みんな制服を着ている
ちなみに制服は小中などの分け方で違う

「優お姉ちゃんおしょいよぉ～早く食べよぉ～」
「ごめんごめん、いただきま～す」
顔の前で手を合わせてごめんの後に
そのままいただきますと言った
今日のご飯は味噌汁にサラダつきの
ご飯！うん、豪華だね
そう考えつつ味噌汁を食べる
「優？どう、おいしい？」
「うんとてもおいしいよ」
お世辞無しで言えるのは嬉しい
特にこの味噌汁は卵が入っている
これがすごくうまいのだ
「そっか優お姉ちゃんが喜んでよかったぁ」
「おお～こっちも嬉しいぞ～…ん？
今、遊南、お姉ちゃんって言った？」
「え？当たり前じゃん、お姉ちゃんなんだからぁ」
「おい、待ってよ！女じゃないよ俺？」
何のいじめだよ
ん、そういやぁなんかあった気がしてならない、
なんだこの感覚…何か忘れてるんじゃ

「優ちゃん俺っていったらだめって言ったやら？
1回言う度に女もんのなんか付けさせるやら」
「兄さん何言ってんの？てか、手にシュシュついてる！
何時の間に！！」
誰がやったかもわからぬ早業で手にシュシュがついていた
「優さんわかりましたか？もう言ったら駄目ですよ？」
「月菜姉まで～ぶ～わかったよ～私っていうから…」
「優お姉ちゃんえらいねぇ～学校でも頑張ってねぇぇぇ…」
「……え、学校もそうなの！う～」

すごく間を入れてから声が出てきた
自分でも声が出せただけすごいと思うほどの驚きだった
「がんばれ優〜〜」
「奈々姉〜〜……仕方ないね」

そして学校には兄さんに送ってもらった
奈々姉達は先に歩いて行ったので
2人の時に兄さんと喋ってたら
髪に髪止めの水色の方を止めてくれた
止めるとますます女の子みたいだった
…別に悪くない…

〜〜学校〜〜
「今日転校生が来るんだって〜
どこのクラスだろ〜」
これはクラスで元気のある男子の一人である
「男子？女子？どっち？」
「制服からしたら男だったと目撃者は言ってたよ！
でもかなり可愛いらしいぜ！」
「「「おおお〜〜〜」」」
すごく騒がしく興奮している人たちと
ちょっとわくわくしている人が
しかし奈々夏は誰のことかわかっていたので
その騒ぎを外からみて楽しんでいたのだった
しかも馬鹿男子は本当に馬鹿だと確信していたので
それも面白く拝見していた

その頃、優はと言えば

「失礼します」

職員室に居た、その理由…いや、当たり前なのだが、
「今日からお前が入る7年3組の担任の田中だ、よろしくな」
「こちらこそよろしくおねがいします、田中先生」
しっかり挨拶をして、学校の事を軽く教えてもらった
先生によると校舎はすごく大きく設備もよくきれいだが
大きすぎて迷子にならないように…」と、注意された
別に方向音痴や天然ではないと（自分では）思っているので
その心配はないとして考えることにした

先生に誘導されて、7年3組の教室までついて行くことになった
まあ、ホームルームで挨拶をして合流するためなのだが…
この廊下を歩いて行くというのがすごく緊張して
心臓がバクバクしているのがわかった

そしてついに7年3組の教室の前に来た
先生にはここで待っとくようにと指示を受けたので
そうすることになった
ちなみにここは2階で景色もいい、まあそんなことはどうでもいいのだが
そんな事を考えていると中から『入っていいぞー』と、
声がしたので教室に入った

～～教室～～
「おーい席に着け～ホームルーム始めるぞ～」
先生が入って来たので騒ぎはしずまりみんな笑顔で先生の言葉を待っていた
「今日は転校生が居るので紹介します」
そういうとみんながみんなを見まわして喜び合っていた
なんせクラスが5クラスもあるからどこに来るかで
わくわくドキドキしていたからだ

「入っていいぞ～」
「失礼します～」
そう言って教室に入って教卓の方に行った
「「「おお～」」」
なぜか歓声がわきあがった
「自己紹介をしてもらおう、どうぞ」
「えっと、私は、福井　優　５月２４日生まれで
すきな教科は体育と家庭です
よろしくおねがいします」
これでたぶんオッケーだと思う
しかし、いや、大丈夫だ…自分でそんなやり取りをしていた
「じゃあ質問のあるやつは居るか？」
そう先生が問うといっぱい手が挙がった
何を聞かれるのかが心配で仕方がない
「えっとじゃあ海音」
先生はそういうとある男子を指名した
「優さんは男子？女子？」
「えっと、男子ですが？女子に見えました？」
そう言うと
「とっても見えました！」
そう返事が返って来たので
クラスは笑っていて自分は顔を赤く染めていた
「じゃあ優さんは奈々夏さんとはどうゆう関係で？」
「え？、双子で自分が弟なだけですが？」
「じゃあ私と言うのはなぜですか？」
ちょっと一瞬迷ったがやはりこれは
「それは秘密です」
が妥当だろうね
言うつもりは今のところない
「えっともういいか？じゃあ次は耀大」

「優さんは前の学校では何の部活をしていましたか？」
うん、安心して答えられる質問だw
「えっと、バスケットボール部です…
もちろん男子ですよ」
勘違いされたくないので、付け加えをした
「そうですか、ありがとうございます」
そうして質問は終わった
「じゃあ優はちょうど開いてるし奈々夏の隣な」
「は～い」
そういうと後ろから3番目の列の席で奈々姉の隣の席に着いた

「じゃあ1時間目の授業に遅れないように」
そういうと先生は教室を出て行った
「ねえねえ優くんはさ～料理で何が得意？」
いきなり前の席の女子が喋りかけてきた
次第に周りからも人が集まったきた
「えっと、私はハンバーグとか得意だよ？
あと、目玉焼きとかも」
「へ～料理上手なんだね～、あ、私涼子、よろしく」
「よろしく～」
いきなりでびっくりしたな～
でも料理は得意だからね～
「優～1時間目体育っしょ～
早く更衣室行こ～」
「ああ～まってよ～てか、体操服、まだ貰ってないんだけど～」
「大丈夫～貸したるさかい～」
「何言って、俺男だ…あ、」

しまった！！くそ～
これはすごい罠だ
「はい、優～これ付けるっしょ～
あと優の体操服なら私が持ってるっしょ～
ちゃんと男もんだから安心して更衣室いってくるっしょ～」
「うん、ありがと～…てっ、付けるのまた髪止めかい！
しかもオレンジか～まあいっか」
そうして更衣室に向かった

～～放課後～～
「あ～疲れた～奈々姉～帰ろうよ～」
「私部活あるんっしょ…あんた男子バスケ部でも
見学してみるっしょ？」
「う～ん、そうしようかな～じゃあ私見てるから
帰るときに電話してね～」
ちなみにこの学校は携帯を持ってきても良いとゆう
校則があります！なんて良い学校だよ！

＝＝見学中＝＝
「う～ん、なんか弱そうだな～…まあ
練習は満足できるし、部活はここにしよっと」
見学しながらそんな事を考えていた
自分はバスケ歴5年ぐらい
小学2年ごろから少しやり始めて
小3からミニバスのチームに入って練習していた
小6の時はミニバスでキャプテンをやっていた
フォワードになりたかったが身長のせいでガードしかできない
まあ、ポイントガードで実力を発揮した、シュートも打ってたし

そんな事を考えていた

プルルルルル　プルルルルル
「はい？奈々姉？」
奈々姉から電話だった
「今から着替えて帰るから校門のとこで待ってるっしょ」
「うん、解った」
そして私は顧問の先生に礼を言ってから
校門の方に行った
先生にどうだ？と聞かれたから
「練習内容は楽しそうです、
考えときますね」と言っといた
先生は笑っていたが小さい声で
「強くは無いぞ」と言っていた

「優、お待たせっしょー」
奈々姉が制服に着替えてやって来た
「さあ帰ろう、家どっちだっけ？」
いきなりの天然に奈々子は少し
笑いを我慢していた
「こっちこっち早く覚えてっしょー」
そういって奈々姉は手を引っ張ってく

帰り道に奈々姉が話してきた
「ねえねえ、部活、どうっしょ？入るっしょ？」
「まあ別に悪くないね…背が高い方だし
強そうだったよ…先生によると弱いらしいけど」
ありのままを話した
「そう、よかったぁ、後、身長あるけど
ポイントガードとかガードが弱いんっしょ～」

奈々姉は偉そうに言った
「そうか～、試合でも勝ったことないのか？」
「一様５試合中２勝ぐらいみたいっしょ
あんまり攻撃の形ができてないからっしょ」
「そっか、ありがとう…あれじゃあ県大は
難しいか…」
「そう？優が頑張れば行けるっしょ、たぶん！
身長じゃ問題ないしシュートのよく決まるのも
ちゃんといるっしょ？ポイントガードが弱いだけ
だから優次第だとおもうっしょ」
奈々姉が自信満々に言って私の顔を見た
「じゃあ大丈夫そうだね！」
「そうだよ、大丈夫。
…優？なんか隠してないっしょ？」
急に奈々姉が聞いてきた
「バレたか…私、前いたところの県の選抜だった
バスケは自信あるよ…」
そう言い終わるともう家の前だった
ちなみに奈々姉はこの事を聞いて
何か思いついたのか
にやにやしていた…
なんだろう、奈々姉もすごくバスケ上手いのかな？
そんな事を考えつつ２人は家に入った
「ただいま～～」
そういうと遊南が元気良く迎えてくれた
そんな遊南をなでながら
ふと、思いついた、そういえばこの家の家計は大丈夫なのだろうか…
まあ考えたところで何も分からないので
今度兄さんに聞く事にしようと納得して
自分の部屋（奈々姉と共同）に入った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8958w/

お兄ちゃんはお姉ちゃん！？

2011年11月15日19時48分発行